



発行所  
 社団法人 国民文化研究会  
 (九州←→東京←→全国)  
 東京都渋谷区東1-13-1-402  
 振替 00170-1-60507  
 電話 03-5468-6230  
 F A X 03-5468-1470

月刊「国民同胞」編集部  
 毎月一回10日発行  
 購読料 年間2000円

# 「等しき慈」

日本民族の色どり

西山八郎

「維摩經義疏」が聖徳太子によって著されたのは、今から凡そ一千四百年前の推古朝の頃のことである。「勝鬘經義疏」に次ぐ吾が国最古の佛典注釈書と言はれるこの御著書を繙くと、經典本文に続いて詳述される太子ご自身の御文章に直接触れることができる。佛典はもとより御注釈文も辞書を片手に読んで難解と言はざるを得ないが、それでも四苦八苦しながら読み進んでいくと、突然視界が開けたやうに心に染みるお言葉に出遇ふことがある。

なかに次のやうな経文が出てくる。

毀譽不<sub>レ</sub>動如<sub>レ</sub>須彌、  
 於<sub>レ</sub>善不善等以<sub>レ</sub>慈  
 心行平等如<sub>レ</sub>虚空、  
 孰<sub>レ</sub>聞人實不<sub>レ</sub>敬承

佛の平等の慈を讃歎したこの箇所は、太子の御釈釈文を参考にするに凡そ次のやうな意味になる。

「他人から誇られたり誉められたりしても、また、苦しいときも楽しいときも心が平らかで動じない様は、まるで須弥山(佛敎の世界でその中心に聳え立つ高い山)のやうである。佛は、善をなす者に対して不善をなす者に対しても、いつも変らぬ慈悲の心で接せられる。このやうに佛の心に分け隔てがないのは、広々として障るもののない大空のやうである。人室を聞いてこれを謹んで承らな

義疏の対象として選定された「維摩經」は、病床にある主人公の維摩居士と慰問のため訪ねてくる佛弟子との問答を通して大乘の敎へを論じていく内容となつてゐる。その初章の佛國品第一に、佛の徳を讃歎する

い者があふよか。皆素直に聞き入れはすである」。

太子は、人の心が揺り動かされる原因として、苦、樂、利、衰、毀、譽などを挙げ、それを風に譬へて、佛の心がどのやうな強い風にも動じない須弥山のやうだと説かれる。「於善不善等以慈」については、「衆生復非を行ひ、善を修すと雖も」と釈され、心ならずも佛の敎へに背くことのある煩惱多き衆生の現実の生をそのまま受け止め、衆生に宿る佛性への限りなき信を貰かれてゐる。そして、「孰聞人室不敬承」については、「誰か等しき慈を聞いて之に歸敬せざらんといふことを明かす」と釈され、經典の「人室」を「等しき慈」と、「敬承」を「歸敬」といふ言葉に読み替へられてゐるのである。「人室」則ち人にとつて室とも言ふべき大切なものを「等しき慈」、つまり佛が身をもつて敎示されてきた分け隔てのない慈しみの心と把へ、閉ざされた人の心を開き動かさずにはおかないことを示されてゐる。

お言葉に触られた御体験を心に刻み込まれてゐたに違ひない。「歸敬」といふ言葉は、敬ひ帰依するといふ意味で、身も心も捧げて信賴するといふ「敬承」よりも更に強い意味が込められてゐる。この言葉からも太子が「等しき慈」の尊さをいかに重く受け止めてをられたかが推察される。

岡潔氏は、その著書「日本のこころ」の中で次のやうに言つてをられる。「私のいま持つてゐる人生觀は、私が選んで採用したものでもなく、自然にそうさせられてそうならざるをえなくなつて生まれたものなのです。(中略)私は、民族はそれぞれ心の色どりを持つてゐると思ひます。日本民族は、日本民族の色どりのうものをもつてゐる」。

「日本民族の色どり」をひと言で表現するのは難しいかもしれないが、私は「等しき慈」といふ美しい言葉がそれに相応しいと思ふ。四季折々の変化に富んだ自然、毎年変ることなく受け継がれてきた報恩の祭り、助け合ひ支へ合ひながら続けられてきた生活の営み。それらの總合力として永い時間をかけて育まれ受け継がれてきた「人室」が「等しき慈」であつたのだと思ふ。

太子の御生涯は、親族をも巻き込み閥族相争ふ激動濁乱の時代の裡にあつた。しかも、国政の中枢にあつて民族の将来を一身に担はれた深刻悲痛のご生涯のなかで、太子は深い慈しみの

(鳥栖市役所 五十二歳)